

才二日(続)

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University

京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

37.5.9 京都新聞(朝刊)

「科学者京都会議」第二日

現代のモラルを説く

谷川教授が注目の報告

昨報「核軍備競争防止、全面軍縮」の「科学者京都会議」第二日の九日(前日)は、湯川記念館史料室で開かれた。

の天庵寺で開かれ、谷川徹三立教大教授の「科学時代のモラル」など三氏の報告と問題提起を中心に活発な意見交換が行なわれた。同日議題には、谷川教授の報告「科学時代のモラル」▽世界平和と日本▽核実験禁止問題などで、席上、谷川教授が理想の世界連邦建設における科学時代の三つの基本的考え方として、①人類意識の自覚の寛容の精神②人間を常に目的として手段としなさい、をそのモラルとしなければならぬと力説したのが注目された。

会議は午前中、田島英三立教大教授が「国連放射能科学委員の報告をめぐって」と題し、同委が一九五八年(昭和三十三年)に発表した第一次報告と今秋発表予定の第二次報告の内容について比較説明した。とくに第二次報告では、結論的に核実験による障害を有効に防ぐ方法はなく、核実験を停止するのが人類の生きのびる道であるとして力説した。

これに続いて谷川教授は「科学時代のモラル」と題し、こう述べた。

科学文明は人類に役立つといわれていたが、問題がなかつたが、いまや科学は人類の破壊を導くことになった。こうした時代のモラルについて次のように語った。

「インシュタイン博士が第二次世界連邦政府(一九四七年)に、世界連邦政府の實現を呼びかけ、『全体的破壊をさける目標は他のいかなる目標より優先に立たねばならぬ』と公開状を送ったのは科学時代が問題となった最初のあらわれ。われわれとしてもいまこそ真剣に世界國家の實現を検討するときが来たといえよう。私自身としては、こうした時代の基本的なモラルとして、①人類意識の自覚の寛容の精神②人間を常に目的として手段としないことを力説したい。

午後からは宮沢健義東大名誉教授が「世界平和と日本」と題し、日本の憲法改正問題、とくに九条の戦争放棄について述べ、戦後の憲法は、敗戦のムード的なもの影響が大きかったが根柢をもって再検討しなければならぬ、と述べ、討議に移った。

c092-015-012